

## 前川國男建築設計事務所 採用試験 提出作文

### 『何故前川事務所に入所したいか』

1981年9月

坂田 泉

建築は、未曾有の昏迷にさまよいつつあるかに見える。様々な建築群に埋め尽くされた都市の露呈している多くの問題は、この時代において建築することのいかに難しく、慎重であらねばならぬかを物語っている。私もこれから建築することを通じてこの時代に関わろうとする以上、この時代のもつ根深い問題を正しく認識することから出発し、その上でどうするかを考えるべきである。そうすることをなしに、直ちに就職だ、建築だというのは、それが私にとって死活に関わることにせよ、余りに安易であり自らの生きる時代に無責任であると考えた。こうした思いの中で私が考えたのは、この時代に対して私の知る限り最もごまかしのない問題意識をもち、誠意ある取り組みをみせている建築家の下で仕事をしようということであった。それが前川國男氏に他ならない。

私のこの判断は、次に述べる二つの問題に対する前川氏の姿勢をその根拠にしている。即ち、(1) 建築家のステイタスの問題と、(2) 建築における技術のあり方の問題、である。

第一の建築家のステイタスについては、先の公取委問題の際に、私は前川氏の基本的な考え方を知り、大変共感した。現代において建築家の立場は極めて不明瞭である。建築家は本来、自らの判断以外の何物によっても拘束されることのない自由な立場を保障されるべきなので、この点が曖昧になり建築家が専ら建てる側の論理に服従するようになった時、建築はいかなる意味でも社会に属する資格を有さない捨て児となるであろう。建てる側も一応は社会の一員であるにしても、現代のような社会では、建てる側の論理とはともすれば他の部分を圧搾する形での末端の肥大を意味する。そうした論理を人間の名の下に引き戻し、その名の下に建築として実現するのが建築家の使命であろう。神でも、君主でもなく、人間の名の下に建築を捧げようとした、近代建築の貴重な遺志を、現代は忘却しつつあるかに見える。人間なる概念は必ずしも明白ではないかもしれない。しかし、少なくともそれが、明確ではあるが暴力的な別の論理にすりかえられてゆくことに私たちはもっと敏感であるべきだろう。私は、このような問題に対する前川氏の発言を、勇気ある正論と考え、誠実な姿勢であると思った。

第二の、建築における技術の問題については前川氏の東京海上ビルを例に採りたいと思う。超高層ビルは、現代の人間の要求に応じて生まれた。しかし、その発想の根底には、空間の垂直方向への均質化という非人間的要請がある。超高層を単なる均質な空間の集積以上の人間的なものにしようという希みは、超高層の基本的発想にとって不純かもしれない。現代の技術が抱える深刻な問題をここに見ることができる。本来人間的要求に応じて生まれたはずの技術が、その純度を増すにつれて必ずしも人間的ではなくなる。このことは、技術が依存する科学的思考それ自体の本性によるのかもしれない。ともかく、洗練されつつある技術は、いきおい非人間的になり、そこでは人間的要求は不純物として時に排除されなければならない。東京海上ビルは、超高層としては、曖昧な相貌を見せる。レンガタイルという時を経るにつれ成熟する素材のためであろうか、機械のように冷徹ではなく、人間的でさえある。東京海上ビルは、現代の抱える先述の矛盾を私に思わせる。理想的な解答をそこに見い出さるか今判断する力を私は持たないが、むしろ、矛盾を矛盾のままにして、呈示しているかに見えるその姿に、私は建築家のごまかしのなさや誠実さを感じ、大いなる拍手を送りたくなるのである。

無謀さは若さの特権であるという。しかし私は、この時代に建築することにしばしたじろがざるを得なかった。前川事務所は、そこに私が見いだした、かけがえのない灯である。